

小劇場の新プログラム～いつもは支援される側の子どもが芸術を担うフリーランスを支える～

野邊壮平（宮崎大学産学・地域連携センター）
高橋るみ子（同）
豊福彬文（同国際連携センター）

宮崎市に「国際子ども・せいねん劇場みやざき」（以下、「小劇場」と言う。）がオープンして10ヶ月が経過した2020年1月に、日本で初の新型コロナウイルス感染症の患者が確認された。それから5ヶ月、ようやく、文化・芸術分野のフリーランス向けに、文化庁の「文化芸術活動の継続支援補助金」の募集がスタートし、それにより、フリーランスのアーティストの存在を市民（子どもを含む）が知るところとなった。

小劇場も1周年記念公演をはじめ、オープンから実験的に実施していた「月一公演」（コンテンポラリー・ダンス）を自粛した。この「月一公演」は、子どもたちの芸術鑑賞の入り口（45分・ワンコイン）であった。そして、そろそろダンス鑑賞が日常になりかけていた子どもたちの耳にも、支援の対象となっているフリーランスのアーティストの情報は届いていた。子どもたちの中には、自分もフリーランスのアーティストを助けたい、助けられるのではないかと思いはじめた小学生（5年生のT君、他）が現われた。

以上が本研究の背景であり、「時勢は教育する」（羽仁吉一）の考え方が動機となっている。

<研究方法>

支援が必要なアーティスト（フリーランス）を助けた体験が、子どもたちの考え方や行動に及ぼした影響を明らかにし、with コロナ（あるいはafter コロナ）の小劇場の新しいプログラムについて考察する。

まず、子どもたちが、自分の行動（WSの受講）がフリーランスのアーティスト（んまつーポス）支援につながっていることを実感してもらえよう、1回の受講料が3,000円の「んまつーポス身体表現WS」（4時間）を実施した。受講料の3,000円は「月1公演」の6倍である。回数は10回。実施期間は2020年3月から10月。募集人数は9名。募集方法はSNSと小劇場のHPで行なった。

次に、WSの受講がフリーランスのアーティスト（んまつーポス）支援につながっていることを実感した子どもたちが、友だちや知り合いを誘いやすいように、1回の受講料が500円の「んまつーポス身体表現WS」（90分）を実施した。回数は5回。実施期間は2020年11月から12月。募集人数は10名。募集方法はSNSと小劇場のHPに加えてチラシを作成・配布した。

最後に、T君（前出）に、フリーランスのアーティスト支援についてインタビューした。

- なお、WSを実施するにあたり配慮した点は、
- ◎ 新型コロナウイルス感染拡大を受けた休校・休園、外出自粛で、外での遊びや自然体験等の機会が減少した子どもたち（の身体性や身体感覚）、
 - ◎ 友だちと会う機会や交流が減少した子どもたち。プツンと切れるオンラインコミュニケーションに寂しさを感じている（逆に、慣れてしまった）子どもたち、
 - ◎ 東京2020オリンピックの延期決定等、誰もが経験したことのない混乱した状態の中、二度と元に戻らないかもしれないという不安や変化する時代を受け入れることができない子どもたち、等である。

<結果および考察>

フリーランスのアーティスト支援が目的とは言え1回3,000円は高い。受講者は少ないだろうという予想に反して28人（のべ70人）の小・中学生が受講した。リピーターは14人。5回以上はT君を含めた7人。また「月一公演」を鑑賞したことのある受講生は20人。受講生の多くが、自分のお財布から受講料を払った。また、アーティストから「ありがとう」と言われた児童の少し誇らしげな表情が印象的だった。

1回500円のWSには、30人（のべ37人）の小中学生が応募した。その内、初めましての児童は21人。この内の6名は、T君が誘った友だちとその兄弟姉妹である。3,000円のWSと比べると、受付で付き添いの大人が受講料を払うケースが多かった。また、「やりたくない」と言ったり、自分勝手に振舞ったりする児童もいて、大人に勧められて受講している印象を受けた。しかし、T君が誘った6名は、「楽しかったから」とその場で次のWSに応募した。

T君のインタビューからは、500円を1,000円へ、次は1,500円、2,000円と少しずつ受講料を上げていけば、5,000円が当たり前になる。また、「んまつーポス」を鑑賞した人が県内から九州圏内、そして日本等へと宣伝をしていけば、いずれは海外からも知られるようになる等の方法をいろいろ考えていることがわかった。

with コロナの時代だからこそ、新しい社会の主役となるべき子どもたちが支援される側になるのではなく、芸術（地方の小劇場やフリーランス）を救う側になったという事実が、“文化・芸術のニューノーマル”をつくり出すのだと考えている。T君の他にも3,000円のWSに毎回友だちを同伴したA君や、まず友だちを誘って次にその兄弟を誘ったKさん等、鑑賞が日常になった子どもたちは小劇場の未来である。